

英語コミュニケーションのためのスキルアップ法

Improving Skills for English Communication

小野寺 進*

Susumu ONODERA

要 旨

英語をある程度習得して大学に入学した学生が、英語コミュニケーション能力を高めるためにはどうしたらいいか。ここでは特にコミュニケーションのために必要とされるリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングのそれぞれについて、授業とか講習に頼らずに、学習者個人が無理なくしかもすぐに効果が期待できるセルフラーニングの具体的方法を提案・紹介する。

キーワード：音読、オーバーラッピング、シャドウイング、リフレージング、リプロセッシング

1. はじめに

英語コミュニケーションとは人が英語を媒介として他者と意思疎通を図ることを意味する。従って、英会話といったような音声を紹介しての伝達だけでなく、手紙やメール、あるいは新聞・雑誌などの文字を紹介しての伝達も英語コミュニケーションになる。

インターネットが普及し、グローバル化が加速している世界情勢にあって、英語でコミュニケーションを図ることは必要不可欠であり、自分の可能性を大きく外へ開く手段にもなっている。2020年の東京オリンピックはもちろんのこと、日本の社会や企業では、停滞した経済から脱するために、海外から人を受け入れるとともに、また自ら世界へ出かけて展開する時に、英語を使う需要が高まってきていることもまた事実である。頭打ちの国内観光も、海外からの観光客を取り込むことであらたな活路を切り開き、また国内の販売では限界が見えてきた企業がそのマーケットを海外に求めることは言うまでもない。

すべての日本人が英語を使えるのは望ましいが、少なくとも大学を卒業した人には英語でコミュニケーションをする時にストレスを感じて欲しくはない。むしろ、自ら進んで他国の人と英語で意思疎通を図り、自分の可能性を世界に広げてもらいたい。

日本語でコミュニケーションをとるのが苦手な人は英語でコミュニケーションをとることが難しいようである。それを克服するには、先ず日本語で充分コミュニケーションをとれるようになってから英語でコミュニケーションをとることである。それには、5W+1Hを使って質問をすることである。例えば、連休中に旅行をしてきた人に、「何時いったのか?」「何処に行ったのか?」「誰と行ったのか?」「何をしに行ったのか?」「何故行ったのか?」「どのような交通手段で?」を問いかける練習をすることである。一つの事柄について複数の質問が常にできるように練習する。そうすれば自ずと話を続ける契機

*弘前大学人文学部
Faculty of Humanities, Hirosaki University

が生まれるようになる。この日本語でのコミュニケーションに十分慣れてから、英語のコミュニケーションのスキルを磨くことが肝心である。

この小論では、英語をある程度習得してきた大学入学レベルの学生が、英語コミュニケーション能力を高めるための自分だけでできる具体的な実践方法を提案することを目的とする。大学を出ても英語が十分に活用できない理由として、英語コミュニケーションのための実践的訓練をしていないことにある。語学の習得には王道や近道はないが、少なくとも持続すれば確実に効果的の上がる学習方法が近年公開されている。学習者は有益な方法を組合せ・援用することで、英語運用能力を高めることができるようになるだろう。

2. 音声を介しての英語コミュニケーション：リスニングスキルとスピーキングスキル

音声を媒介としてコミュニケーションを図る場合、必要となるスキルはリスニングとスピーキングである。今日では、英語コミュニケーションあるいはグローバル・コミュニケーションを行う場合、発音よりも話す内容が重視される傾向にある。かつてはグローバル化に対応するため、英語を話せる帰国子女を採用したが、英語を話せても仕事の内容を理解できず、コミュニケーションが取れないことがわかった。またグーグルの人事採用では、学習して問題を解決する能力や情報を理解して応用できる能力といった、一般認識能力のある人材が求められている。それ故に、英語の発音は良いが、コミュニケーションの内容がない人はもはやビジネス界では不要とされる傾向のようである。

では英語のネイティブ・スピーカーが世界中でどのくらいいるかということ、ほんの2割程度である。国際連合を例に取ると、国連会議で使用される公用語はアラビア語、中国語、英語、フランス語、ロシア語、スペイン語の6カ国語で、国連事務局が日常業務で使用する言語は英語とフランス語となっている¹⁾。各国からの人々が集まる国連で話される英語にはそれぞれお国なまりがあり、一般的にはグローバル・イングリッシュ（グロービッシュ）と呼ばれ、アラビア語英語、中国語英語、フランス語英語、ロシア語英語、スペイン語英語などと言われている。そうした観点から考えると、コミュニケーションの本質は互いの意思疎通にあるので、通じるのであれば日本語英語で十分であると言える。だからと言って発音は二の次というのは乱暴な言い方である。やはり相手の言うことを正確に聞き取り、伝えたいことを正確に伝えるには正しい発音を身につけることが基本になる。その上でお国なまりがあっても初めてコミュニケーションが可能となるのである。

2.1. リスニングスキルアップ：音読 (reading aloud)、オーバーラッピング (overlapping)、シャドウイング (shadowing)

ではどうすれば正しい英語の発音ができるのか。それには7つの母音と25の子音を発音記号通りに発音することである²⁾。歯と舌のポジション、唇の形、息の出し方によって発音は決まる。それには正しく口を開いているか、舌の位置をきちんと意識しているか、唇を正しく形作っているか鏡を見ながら毎回確認する必要がある。しかし、もしこれが難しいなら、似た発音を明確に区別すること（例えば、母音5つのア [ʌ][æ][ə][ɑ][ɔ]と子音 [r][l]/[θ][ð]/[s][ʃ]）と、日本語では音の出し方が難しい子音 [f][v]を繰り返して練習することで、ある程度英語の発音は克服できるようになる。

個々の音を正しく発音できたら、次に単語や文の形で声に出して読み上げてみる。英語の音を聞き取れるようになるには、インプットだけでは不十分で、アウトプットが必要となる。なぜなら自分が出せない音は自分の耳には聞こえてこないからである。そのためのファーストステップは音読である。文章を見ながら声に出して読み上げる方法³⁾で、昔、国語の教科書を音読したように英語の文章を声に出して音読することである。できればCDやDVDなどを利用して英語ネイティブ・スピーカーの声を真似て読むことである。さらに正しく発音ができているかどうか確認しながら行うことが大切である。

次のステップはオーバーラッピングである。音声に合わせて同時に声に出して読む方法で、アクセントや息継ぎに注意しながら読む。また同時にネイティブの話すスピードに慣れる必要もある。最初はゆっくりしたスピードから、次第に日常話されるスピードについていけるよう練習する。ニュースなどで話されるスピードについていけるよう目標を立てる。

オーバーラッピングの次はシャドウイングである。この方法はテキストを見ないで、音声だけを頼りに、話される英語スピーカーの声を追いかけて話す練習である。テキストは見ないで文章を読み上げるのでかなり難しい。シャドウイングができるようになる頃には、リスニング能力は相当向上しているはずである。

このように、音読、オーバーラッピング、シャドウイングと音声をアウトプットすることで学習者の英語耳を鍛え、リスニング能力を高めることができる。

2.2. スピーキングスキルアップ：リフレージング (rephrasing)

リスニングがある程度できるようになったら、次はスピーキングである。聞き取れるようになったらすぐ話せると考えるのは間違いで、英語のネイティブ・スピーカーが使うフレーズを使って話せるようになるには相当の時間を必要とする。そこで、どのようにしたら相手に自分の意思を伝えることができるか考える。自分が言いたいことをすぐに思い浮かばない場合、沈黙ができてしまい会話が途絶える。それを回避する方法が「リフレージング」である。言いたいことを簡単な言葉に置き換えて、説明して自分の意思を伝えていく方法で、ネイティブのように話すという考えを捨て、どんどん言葉を繋いで相手に伝える練習である。リフレージングの仕方について、大橋健太は以下の5つのステップを提案する⁴⁾。

- ①シチュエーションを設定する。
- ②単語をイメージ（連想）する。
- ③〈5W1H+Emotionメモ〉で情報を整理する。
- ④かんたんな日本語に置き換える。
- ⑤STVで、日本語を英語に訳す。

ステップ1でシチュエーションを設定するのは、それが「日本語を英語にする上で、非常に大切な情報」となるからである。その理由は「同じ日本語でもシチュエーションによっては、別の英語に言い換えられる」からである。例えば「耐えられない」という日本語を英語にする場合、状況によって表現が異なる。「もし残業ばかりしている人がその状況に「耐えられない」という場合は、「残業をしたくない」と言い換えられる。よって“I don't want to work overtime.”になる。また「レストランにいる人が、隣の席に大声で話をしている人を見て「耐えられない」と言う場合は、「ここにいたくはない」と言い換えられる。よって“I don't want to be here”になる。同じ「耐えられない」という日本語であっても、シチュエーションが違えば英語表現が異なる。

ステップ2では、ステップ1からイメージできる単語を探す。例えば「ダイエットをしたい」と言いたい場合に、weight, down, slimなどが思い浮かぶ。「ここでイメージ（連想）できる単語が多ければ多いほど、この後のステップがスムーズ」になる。

ステップ3では、イメージできる単語を探すことができれば、「5W1H+Emotion」に沿って、それらを整理する。5W1H+Emotionとは、Who: 誰が? When: いつ? What: 何を? Where: どこで? Why: なぜ? How どうやって? Emotion: どんな気持ち? (感情)になる。相手に伝えるためにはそういった情報を整理しておく必要がある。

ステップ4では、簡単な日本語に言い換える。ステップ3で整理された情報から、言いたかった内容を自分の言いやすい日本語にする。

最後のステップでは、主語+時制+動詞の順番で英語に置き換える。特に時制が重要で、言いたい内容が過去なのか、現在なのか、未来なのかをはっきりさせる。

では具体的な例をそのステップに添って英文にしてみる。「外資系の企業に就職したいので、英語の運用能力を高めたいと思っている」という例文を英語にする。“I would like to enhance my English competence to get a job of foreign company.”となるが、「運用能力=competence」や「高める=enhance」がすぐに出てこない場合に次の5つのステップで英語する。

- 1、シチュエーションを設定する。「外資系の企業に就職したい。だから英語を聞いたり、話したり、読んだり、書けるようになりたい」。
- 2、単語をイメージする。その風景をイメージしながら、パッと思いつく単語をいくつか書いてみる。「外資系」、「企業」、「就職する」、「聞く」、「話す」、「読む」、「話す」など。
- 3、「5W1H+Emotionメモ」で情報を整理する。「運用能力」という単語を思い出せない場合、具体的な出来事を伝えることで、運用能力を表現する。誰が運用したいの？「私」。何を運用するの？「英語」。運用しているのは？「聞く・話す・読む・書く」。外資系企業って何？「外国の会社」。誰が就職したいの？「私」。
- 4、かんたんな日本語に言い換える。「どうしたいのか？」「英語が聞き取れたり、話せたり、読めたり、書けるようになりたい」「何のために？」「外国の会社に勤めるために」
- 5、主語+時制+動詞で日本語を英語に直す。主語「私は」I+時制「したい」（現在形）+「外国の会社に就職する」（work at a foreign company）。そのためには「私は」I+「時制」「しなければならない」（現在形）+「聞いたり、話したり、読めたり、書いたりする」（want to listen, speak, read and write English）。

従って、言いたいことは以下の内容で十分通じることになる。

I want to work at a foreign company.

So I must be able to listen to, speak, read and write English.

以上のプロセスを繰り返し行うことで、リフレージングが容易になり、学習者は正しい英語へと修正を施していけるようになる。

3. 文字を介しての英語コミュニケーション：リーディングスキルとライティングスキル

3.1. リーディングスキルアップ：パラグラフリーディング (paragraph reading)、

コレクトリーディング (correct reading)

英文を読むということは、英語を日本語に置き換えるという作業ではない。何が書いてあるのか？書き手が言いたい事は何か？大切なことは何か？それらを理解することが英文読解になる。そのためには英文和訳ではなく、パラグラフの構造を把握することが重要となる。

パラグラフというのは一つのトピックについての文の集合体を言う。ゆえに、パラグラフの「メインアイデア」(main idea) はトピックに関する最も重要なポイントになる。しばしばこの「メインアイデア」はパラグラフの第1センテンスか第2センテンスにあり、そのセンテンスをトピックセンテンスと言う。パラグラフの他のセンテンスはこの「メインアイデア」を説明し、支えたりするもので、「ディテール」(details) と言う。パラグラフの「メインアイデア」を同定することが読んである英文を理解する助けになる。

以下の記事の「メインアイデア」は何かを見てみる。

Japan's notoriously expensive education will get more expensive from April. Most of the country's prestigious private universities will raise their tuition and other fees from April. Of 39 private universities with more than 10,000 undergraduates, at least 13 have said they plan to increase fees, even though they are already extremely high.

(“Higher university fees raise concern” from *The Japan Times on Sunday*, 2014. 下線部は筆者)

下線部を施した箇所が「メインアイデア」になる。他のセンテンスはそれをさらに詳しく説明する「ディテール」になる。こうして「メインアイデア」を認識することで、このパラグラフでは「日本の著名な私立大学が4月から学費を値上げする」ということを言いたいのが理解できる。第2センテンスからは、その値上げの詳細の説明になっていることがわかる。「メインアイデア」を見極めることで、パラグラフで何を言いたいのかを把握できるようになる。

次に、パラグラフの内容がわかったとして、センテンスを正しく理解することが必要となる。そこで「コレクトリディング」が必要となる。全体がわかって、部分部分を正しく読むことができないと、正しい内容把握にはならないし、誤読・誤訳を避けるためにも、文法をおろそかにはできない⁵⁾。

〈例文1〉

Jimmy goes to bed hungry. Not when he was young.
Practically never then.

この英文を読む際に、二つの否定文 “Not when he was young.” と “Practically never then.” がポイントになる。第1文は「ジミーは空腹のまま床に就く」で問題はないが、第2文は否定省略文になっている。省略しない文は “He did not go to bed hungry when he was young.” となる。それ故「若い頃はそうではなかった」となる。また第3文では “Practically” という副詞が鍵で、「実際に」ではなく、「ほとんど」という意味に取り、「その当時は一度もなかった」となる。従って、「ジミーは空腹のまま床につく。若い頃はそうではなかった。当時は一度もなかった」になる⁶⁾。

〈例文2〉

You shall die.

この単文を理解する鍵は助動詞の “shall” であり。“shall” は未来を表す助動詞だが、同時に話者（語り手）の意志も表す。通常 shall は一人称である I や We と共に用いるが、You を主語にした場合、主語に対する話者の意志・約束・脅迫などを表すのに使われる。従って、「あなたは死ぬでしょう」ではなく、話者の脅迫の意味を込めて「殺すぞ」となる。

〈例文3〉

George Bush's victory in the 2000 presidential election was an extremely narrow one, with a controversy over who won Florida's electoral votes, among others.

この英文はどのように読んだらよいだろうか。文の最後に出てくる “among others” は辞書などでは熟語で「とりわけ」とか「その上」とかという意味があるが、ここでそれを適用すると読み間違えてしま

う。「とりわけフロリダの選挙人についての論争を起こした」では意味が通らない。ここで注意すべきは、コンマの位置である。先の意味ならわざわざamongの前にコンマは必要ない。なぜoneの後にコンマがあり、amongの前にコンマがあるかを考える。するとoneとothersが対になっていることがわかる。最初から文を読めばoneはvictoryのことであるとわかる。従って、othersはother victoriesの省略形だということに気付く。この文は、ふたつのカンマにはさまれた挿入部分を除くと「大統領選でのブッシュの勝利はほかの勝利と比べてはるかに僅少差のものだった」となる⁷⁾。

このように3つの例文を見てもわかるように、英文を理解するには文の構造を文法的に解説できることが必要となる。根気よく英文をじっくり読むということも英語上達には不可欠なのである。

他にも、情報を読み取るスキヤニング (scanning) 法や、英語を語順のまま理解するサイトトランスレーション (sight-translation) 法 (同時通訳が行っている) もあるが、それについては別の機会に取り上げることとする。

3.2. ライティングスキルアップ：リプロセッシング (reprocessing)

このリプロセッシングというのは同時通訳者が行っている方法で、言語構造・思考パターン・価値観のギャップを考えるとというものである。実際の通訳の現場で使用される方法であるが、英文を作成するのに有効な方法だと考えられる。このリプロセッシングのトレーニングは次の3つのステップを行う⁸⁾。

- ステップ1 発言の真意を確認し、それに沿った日本語に置き換える。
- ステップ2 ステップ1で置き換えた日本語を、英訳可能な日本語にする。日本語で省略されていることの多い主語や目的語を明確にする。
- ステップ3 ステップ2の日本語を英語に訳す。

では、上記のステップに従い、リプロセッシングを見ていく。

〈例文4〉 「お知恵を拝借させてください」

- ステップ1 「知恵」は「アドバイス」ということを表し、「拝借させてください」は「いただけないでしょうか」となる。
- ステップ2 さらにしょうかは「することができるか否か」になる。よって
I wonder if you could ~を使う。
- ステップ3 I wonder if you could give me some advice.

〈例文5〉 「なんのお構いもできませんが」

- ステップ1 「どうぞお入りになって、ごゆっくりなさってください」に置き換える。
- ステップ2 「どうぞお入りになって」は「どうぞ入って下さい」に、「ごゆっくりなさってください」は「(そして自宅にいるように) くつろいで下さい」に直す。「どうぞ入って下さい」は Please come in を、「くつろぐ」は make oneself at home を使う。
- ステップ3 Please come in and make yourself at home.

〈例文6〉 「心中お察し申し上げます」

- ステップ1 「そのことをお聞きして、とても気の毒に思います」に置き換える。

ステップ2 「私はとても気の毒に思う。そのことを聞いて」に直す。「私は気の毒に思う」はI am very sorryを、「そのことを聞いて」はto hear thatを使う。

ステップ3 I'm very sorry to hear that.

〈例文7〉 「皆様にこのような多大なご迷惑をおかけしてしまいましたことを重ね重ねお詫び申し上げます」

ステップ1 「私は深くお詫び申し上げたいと思います、皆さん全員に対して我々がもたらした迷惑のすべてに関して」(謝罪)に直す。

ステップ2 「深くお詫びする」はdeeply apologizeを、「迷惑のすべて」はall the troubleを使う。

ステップ3 I'd like to deeply apologize for all the trouble we have caused you all.

このリプロセッシングは同時通訳者が行う方法であるが、上記でみたように、日本語から英文に直すのに極めて有効であることがわかる。和英辞典を引いて、そのまま英文を転写した結果意味が伝わらないのは、二つの言語文化がそこに介在するからである。二つの言語文化を一瞬で行き来する同時通訳者のリプロセッシングは、まさにその問題を解決してくれる。

4. おわりに

これまで見てきた英語スキルアップ法がすべての英語学習者に役立つ訳ではない。しかし、なんとか英語を上達させようと模索している学習者にとっては少なからず有益なものとなるであろう。反復と積み重ねがとても大切で、インプットよりもアウトプットを重視すべきであることは、「沈黙は金である」という日本人のマインドセットを変えていく必要があることを示している。英語ネイティブ・スピーカーを前にして臆せずに対応するのは、そう簡単な作業ではないが、少しずつ自分の意見を外に向かって発することで、十分克服できるはずである。

最後に、英語を学習する時の教材について付け加えておく。ハワイ大学で開催された英語指導者のためのワークショップで強調されていたことは、オーセンティックな英語教材、つまり英語ネイティブ・スピーカー向けの実際の現場で使用されている教材、が英語習得に効果があるということである。インターネットが身近になった今日ではそうした教材を手に入れることは容易なはずである。しかし、すべてが良いというものではない。例えば、リーディングであればペーパーバックの洋書とかThe Japan Timesのような英字新聞（もし難しいのなら、日本の中高生向けに書かれた英字新聞Mainichi WeeklyとかStudent Timesなども良い）、リスニングならウェブを通じてのTEDかNHK World TVなどがお薦めである。カタカナは英語ではなく日本語である。まずはカタカナを忘れて英語の文字に親しむことから始めることが大事である。The sooner we start learning, the better.

引用文献

越前敏弥, 『日本人なら必ず誤訳する英文』 ディスカヴァー携書, 2009.

大橋健太, 『魔法の英語エクササイズ』 すばる舎, 2014.

斉藤 淳, 『世界の非ネイティブエリートがやっている英語勉強法』 中経出版, 2014.

竹内真生子, 『日本人のための英語発音完全教本』 アスク出版, 2012.

田中栄一, 『「英語脳力」養成講座』 かんき出版, 2014.

田村智子, 『同時通訳が頭の中で一瞬でやっている英訳術リプロセッシング』 三修社, 2010.

『同時通訳が頭の中で一瞬でやっている英訳術リプロセッシング (ドリル)』 三修社, 2011.

注

- 1) 国際連合については (<http://www.un.org/>) を参照。
- 2) 7つの母音は [a][i][u][e][o][ə][æ] で、25の子音は [ɾ][r][l][θ][ð][f][v][t][d][s][z][w][p][b][k][g][ʃ][ʒ][tʃ][dʒ][h][j][m][n][ŋ] になる。この発音記号は国際音声記号 (International Phonetic Alphabet: IPA) に基づくものである。イエール大学方式の英語発音矯正については、斉藤淳『世界の非ネイティブエリートがやっている英語勉強法』を参照。また正しい英語発音を身につける教材としては、竹内真生子『日本人のための英語発音完全教本』がお薦めである。
- 3) 近年、音読に関する英語教材が多数出ている。「音読ドリル」と呼ばれるものが多いが、市販されているものでなくても練習として使うことができる。例えば、中学や高校の時の英語のテキスト、英字新聞、英語雑誌、英語で書かれたペーパーバックなどでも大丈夫。ただし、吹き込まれた音声を参考に模倣する練習ができるので、CDやDVDが付属しているものの方がより良い。
- 4) このリフレージングという方法は、帰国子女が英語を身につけるプロセスをもとに考えられたものである。以下、説明とステップ1と2の例については、大橋健太『魔法の英語エクササイズ』を参照。
- 5) コレクトリディングについては、越前敏弥『日本人なら必ず誤訳する英文』を参照。
- 6) 越前敏弥、178。
- 7) 越前敏弥、206-208。
- 8) 以下の例(4~7)と説明については、田村智子、『同時通訳が頭の中で一瞬でやっている英訳術リプロセッシング』を参照。